

野口悠紀雄「「仮説を作るAI」出現で科学者たちは不要に!?AIとの"知的分業"をどう進めるのか」調査報告

Claude Fable 5.1

TL;DR

- 記事は「科学者は不要になるのか」に対し、**単純な不要化ではなく「仕事の重心が『答えを見つける』ことから『価値ある問い（問題設定）を見つけ、価値判断する』ことへ移る」という条件付き・役割転換論**で答えている。ただし記事末尾の断定的結論文言と「知的分業をどう進めるか」の具体的処方箋の逐語は会員限定部分のため確認できず、方向性はメタ要約と前半・後半見出しから確度高く推定した。
- 記事が引く2つの中心事例は一次ソースで実在を確認できた――(1)「約80年未解決の数学問題」= OpenAIが2026年5月20日に発表したエルデシュ「単位距離予想」の自律的反証、(2)「遺伝子/仮説生成」= GoogleのAIコサイエンティスト（Penadés超多剤耐性菌研究）およびGoogle DeepMind×Yaleの「C2S-Scale 27B」（がん免疫の新規仮説）。ただし記事は**朝日新聞8月22日一面の伝聞に依拠し、固有名詞・一次ソースを本文に明示していない**。
- 2026年時点でAIは仮説生成・文献統合・数学的推論で急速に到達度を高めたが、**実験検証・再現性・新規性/価値の最終判断・責任帰属は人間に残る**。数学界の「ライデン宣言」（IMU支持、24時間で1000人超署名）とDABUS特許判決群（日米英独が「発明者=自然人」を確認）が、その制度的・認識論的境界を明確に示している。

1. 記事の概要と論旨

1.1 書誌情報

- タイトル**：「「仮説を作るAI」出現で科学者たちは不要に!?AIとの"知的分業"をどう進めるのか」
- 筆者**：野口悠紀雄（一橋大学名誉教授）
- 初出**：ダイヤモンド・オンライン、連載「野口悠紀雄 新しい経済成長の経路を探る」、**2026年9月10日6:15公開**（会員限定=記事タイプSILVER）。担当編集：小栗正嗣。
- Yahoo!ニュース転載**：2026年9月12日（依頼で示された公開日）。配信元表記はダイヤモンド・オンライン。
- タグ**：生成AI / 知的労働者 / 仮説 / 消費税減税 / 遺伝子発見 / 単純労働 / 知的作業 / 大学入学共通テスト / 価値判断。 (diamond)

1.2 論旨（確認できた範囲、主要部は逐語）

記事冒頭：「最先端AIが、科学上の新しい発見を始めた。**8月22日の朝日新聞は一面トップで**このように伝え、いくつかの実例を挙げている。」ここで挙げる2例は、(1) **遺伝子の発見**（人間なら膨大な時間がかかる作業をAIが極めて短時間で成し遂げた）、(2) **約80年間未解決だった数学問題をAIが自律的に解明した例**。加えて「**日本では今年の初めに、AIが大学入学共通テストで人間の受験生を上回る高得点を取った**」ことに触れ、「それからまだ1年もたっていないのに、AIは単に既存の知識を使って問題を解くだけでなく、人間がまだ知らなかった答えを見つけることができる場所にまで進んだ」と述べる。

前半の結び（逐語）：「これからの世界は、むしろ答えや仮説が過剰に供給される時代になるかもしれない。そうすると、科学者の仕事や知的労働者は、『いま考えるべき問題は何か』を見つける能力が重要になるだろう。」（Diamond）

後半（会員限定）の中見出しは「**単に知識を持っていることの価値は低下 「問い」の価値は残るがAIの方が優れる場合も**」。本文（逐語）では、創薬・遺伝子研究を例に「仮説をAIが大量に生み出し、その中から可能性の高いものまで選べるのであれば、これまで研究者が行ってきた仕事のかなりの部分をAIが担う」「そのような作業ですら、人間よりAIの方が優れている分野が出てくるかもしれない。そうなれば、人間が問いを作り、AIが答えるという単純な分業は崩れる。AIが問いを作り、AIが答えを探し、その答えからさらに新しい問いを作るという循環が成立する可能性がある。人間の関与がほとんどなくても、科学研究が前進していくことが考えられる」と論じる。

また野口氏は「**私のように評論的な記事を書いている者も、これを重大な問題だと考えている**」と自らの職業へ論を引き寄せ、「究極的にはどのような分野でも、知識を持っていること自体の価値が、確実に低下していく」と述べる。従来「答えは問いがあって初めて作られる」「価値ある答えが生まれるのは重要な問いが立てられた場合」であるから問題設定（問い）の価値は残ると考えてきたが、（Yahoo!ニュース）その問いを立てることさえAIが優れる場合がありうる、という論の運びである。

記事のメタ要約（逐語）は結論の方向を示す：「研究者、科学者ら知的労働者の仕事は『答えを見つけること』から、『問題を探し出すこと』に移り、『価値があるのはいかなる問いか？』の判断が重要になる。」（diamond）

未確認事項：記事末尾で「不要になる / ならない」をどう断定的に結ぶか、および「知的分業をどう進めるか」の具体的処方箋の本文逐語は、ペイウォールおよびYahoo側robots制限のため確認できなかった。タイトルが「!？」（反語）で終わること、およびメタ要約から、**単純な「不要」論ではなく「役割転換論（問題設定・価値判断へのシフト）」**であると判断される。タグに「消費税減税」があることから、後半で「価値判断」の具体例として時事的政策論に触れた可能性が高いが、逐語は未確認。

1.3 連載上の位置づけ

野口氏は近年、生成AIと知的活動をめぐる論考を各媒体で継続している（『生成AI革命』日経BP、『「超」創造法（Hanmoto） 生成AIで知的活動はどう変わる?』幻冬舎新書、東洋経済オンライン連載「経済最前線の先を見る」、FinTech Journal連載「デジタルイノベーションの本質」など）。一貫した主張は「AIは単純労働と定型的知的作業をまず代替する / 人間はアイデア創造・問いの設定・価値判断に集中せよ / ChatGPTには『答え』ではなく『問い』を聞け」というもの。

本記事は、その延長線上で、AIが「仮説生成 = 科学の核心」にまで踏み込んだ最新状況を受け、**従来「人間に残る」としてきた問題設定の領域さえ揺らぎうると論じた点で**、やや悲観方向に踏み込んだ位置づけにある。関連する直近の同著者論考として、東洋経済「経済最前線の先を見る」第165回（2026年2月1日）で、**「OpenAIの最新モデル『GPT-5.2 Thinking』に2026年度大学入学共通テスト15科目を解かせたところ、得点率が96.9%に達し、9科目で満

点、受験生平均との差は約39ポイントに及んだ」**と報じており（検証はLifePromptと日経の共同企画）、本記事の「共通テスト」事例は同一の話題系列とみられる。

2. 事実確認（記事の記述と一次ソースの照合）

2.1 「約80年間未解決だった数学問題をAIが自律的に解明」

- **該当事象（一次確認済み）**：OpenAIは**2026年5月20日**、社内の汎用推論モデルが、**1946年にポール・エルデシュが提起した離散幾何学の「単位距離問題（unit distance problem）」の予想を自律的に反証したと発表**。OpenAIは「著名な未解決問題（あるサブ分野の中心的問題）がAIによって自律的に解かれた初の事例」と表現し、約125頁の証明を提示。フィールズ賞受賞者ティモシー・ガワーズは併走論文で「AI数学のマイルストーン」と評価、Will Sawinが下界を $n^{1.014}$ ($\delta \geq 0.014$) に精密化した（arXiv:2605.20579）。AIは代数的整数論（無限類体塔、ゴロド-シャファレヴィッチ理論）を離散幾何学に架橋し、従来の「正方格子配置がほぼ最適」という定説を覆した。
- 「約80年」は1946年の予想（2026年で80年）と整合。「自律的に解明」は概ね正確。
- **文脈上の留意**：2026年は数学分野でAIによる証明発表が相次いだ年で、**9月8日にはOpenAIがミレニアム懸賞問題の一つ「ナビエ-ストークス方程式の存在と滑らかさ問題」の一部解決の証明を**、約1万のAIエージェントを並列稼働（約88時間）させ生成したと発表した。これは独立検証前でAnthropicの数学者らが経緯に反発するなど論争がある。（Yahoo!ニュース）記事が朝日8月22日に依拠している以上、中心事例は**エルデシュ問題（5月）**を指すと判断される。

2.2 「遺伝子の発見 / 仮説をAIが短時間で」

- **有力候補1**：Googleの「AI co-scientist」（Gemini 2.0基盤のマルチエージェント系）。インペリアル・カレッジ・ロンドンのJosé Penadés教授らが超多剤耐性菌の水平伝播機構（cf-PICIが別種ファージから尾部を獲得して宿主域を広げる機構）を**10年**かけて解明した未公表仮説と同じ答えを、AIが**約48時間で第1候補**として提示（別に4つの仮説も提示）。bioRxiv 2025年2月19日プレプリント。Penadésの逐語：「これがトップ、最初に提示された仮説だった……まさに衝撃的だった」。共著のDr. Dias da Costa：「システムは答えを出す、それは実験で検証されねばならない。答えを普遍的真理として受け取ることはいできない」。
- **有力候補2**：Google DeepMind×Yaleの「C2S-Scale 27B」（Gemma基盤・270億パラメータ、2025年10月15日発表）。（MedPath）がん治療で、CK2阻害剤シルミタセルチブ（CX-4945）が低用量インターフェロン存在下でヒト神経内分泌細胞の抗原提示を約**50%増やし「冷たい腫瘍」を「熱く」しう**という新規仮説を生成・実験検証。**4,000超の薬剤を仮想スクリーニング**し、うち相当割合が文献に前例のない候補だった。Google：「この結果は新しい種類の生物学的発見の設計図を提供する」。
- Co-Scientistは**2026年5月19日にNature論文**として正式発表（実験ツール「Hypothesis Generation」を研究者に提供開始）。FutureHouseの「Robin」も同時期にNature掲載。（The Conversation）（Nature）
- **評価**：記事の「遺伝子の発見」は上記の「遺伝子・創薬に関する仮説生成」を一般化した表現であり、方向性としては正確。ただし固有名詞（研究機関・システム名）を本文に明

示しておらず、朝日新聞の伝聞に依拠している点は一次検証上の限界。

2.3 「大学入学共通テストで人間を上回る高得点」

- 野口氏の東洋経済連載（2026年2月1日）の「GPT-5.2 Thinkingが共通テスト得点率96.9%、9科目満点、平均比+約39ポイント」という記述と符合する可能性が高い。ただし本記事本文ではモデル名・得点は明示されていない。

2.4 誤り・誇張・留意点

- 記事は**朝日新聞8月22日一面の伝聞に依拠**し、原論文・一次発表を直接引用していない。事例の固有名詞（研究機関・AI名・遺伝子名・数学問題名）が本文に欠けるため、読者が一次検証しにくい。
- 「AIが自律的に」「**人間の関与がほとんどなくても科学研究が前進**」という表現は、一次ソースの含意（AIは仮説生成・推論に優れるが**実験検証は人間が行い、独立検証が必須**）を捨象し、可能性の提示としてはよいが到達度としてはやや誇張方向に振れている。Penadés自身も「AIは画期的仮説を提案できるが、確認の実験は人間が行わねばならない」と明言している。

3. 関連する「仮説生成AI」の最新動向（2026年9月時点）

- Google「AI co-scientist」**： Gemini基盤マルチエージェント（Generation / Reflection / Ranking / Proximity / Evolution等）。self-play型の科学的討論、トーナメント式ランキング（Elo）、進化的改良で仮説を生成・批判・洗練。Nature掲載（2026年5月）。203の研究目標で評価。
- C2S-Scale 27B（Google DeepMind×Yale）**： 単一細胞解析基盤モデル。がん免疫の新規仮説を生成し実験検証（上記2.2）。
- FutureHouse「Robin」**： 創薬リパーパスに特化したマルチエージェント。 ([Phys.org](#)) 患者由来細胞での仮説検証を実証。
- OpenAI**： 数学の未解決問題への挑戦（エルデシュ単位距離予想の反証=5月、ナビエーストークス一部証明=9月）。多数エージェントの協調による「AI研究チーム」型。
- Sakana AI「The AI Scientist」 / AI Scientist-v2 / CRUX等**： 論文執筆までの自動化研究。ただし採択率・品質に限界（naiveなアイデア、実装エラー、不正確な引用、幻覚）が公表されている。
- 日本の政策・基盤**： JST-CRDS報告書「AI for Scienceの動向2026」（2026年2月、CRDS-FY2025-RR-05、本体151頁）、 ([Current Portal](#)) 文部科学省「AI for Scienceの推進に向けた基本的な戦略方針」（2026年3月31日）、JST「AI for Science革新的研究推進事業（ARiSE）」、「SPReAD 1000」など。JST-CRDS/文科省共催「AI for Science 2026 公開シンポジウム」が2026年9月17日開催予定。 ([Jcore](#)) CRDSは自律系AI4S（AIが主体）と支援系AI4S（人間が主体）を区別して整理している。

4. 反響・評価

- 公開当日のため、本記事（記事ID 398882）を名指しで論評した**第三者の反響**（Yahoo! コメント、note、X）は確認できなかった（Yahoo!コメント欄はrobots制限で取得不

可、note/Xでも本記事名指しの投稿はヒットせず）。野口氏本人のX

(@yukionoguchi10)・noteは活動中だが本記事の告知・反響は特定できなかった。この点は今後増える可能性がある。

- 代替として、同種論点（「AIは仮説生成が得意だが検証・判断は人間」「automated science」「AI科学者は科学者を置換するか」）の専門的議論を整理する。
 - **数学界「ライデン宣言」(Leiden Declaration on AI and Mathematics)**：2026年6月2日公表、国際数学連合(IMU)支持。共著者Mateja Jamnik (ACM)によれば**公開24時間で1000人超が署名**、その後フィールズ賞のペーター・ショルツ、テレンス・タオら計2800人超に拡大。日本数学会も2026年6月8日付で会員周知。AIを「著者ではなく道具」とみなし、証明の正確性・引用・帰属の責任は人間に残ると明記。ショルツ逐語：「これは素晴らしい宣言だ.....数学は人間の数学者の共同体においてのみ栄える」。政策提言逐語：「誇大宣伝を信じるな。技術産業には自社製品の能力を過大に語る強い商業的動機が現にある」。
 - **Nature編集部「AI scientists」社説**(2026年3月25日)、Nature Machine Intelligence「Towards agentic science」(2025)：agentic scienceの機会とリスク(信頼性・再現性・責任ある統合)を論じる。
 - **Phys.org / The Conversation**(2026年5月)：Robin/Co-Scientistは人間入力に大きく依存し、仮説の直接検証はできず、言語ベース推論の不正確さという根本的限界を露呈すると指摘。
 - **arXiv「Are Researchers Being Replaced by AI?」**(2026年5月)：研究者は「創造者」から「キュレーター」へ移行しつつあり、責任は残るが知的所有権を失うリスクを警告。(arXiv)
-

5. AIとの知的分業の論点整理（研究プロセス段階別）

段階	2026年9月のAI到達度	人間の役割・限界
文献調査	高（RAG・文献エージェント）	クエリ設計と信頼性評価。限界＝幻覚・偽造引用（AI slop）
仮説生成	急速に向上（Co-Scientist、C2S-Scale等）	問いの設定と新規性・価値判断。限界＝既存知識バイアス、真の新規性評価の困難
実験設計	AI支援が進展	制約条件・倫理・安全の担保
実験実施（自律ラボ）	self-driving lab（Boiko et al.のCoscientist等）で進展	物理的検証がコスト・時間の律速
データ解析	AIが強い	交絡・誤差・解釈の監督
検証・再現	弱い（最大のボトルネック）	再現性危機、AI生成結果の独立検証負担
論文執筆	下書き可能	品質・剽窃・帰属の管理
査読	AI支援は議論中	責任と信頼の契約（ライデン宣言、SIAM等）

制度的・倫理的課題

- **著者性**：ライデン宣言はAIを著者と認めず、責任と帰属は人間に。（[Leidendeclaration](#)）
- **発明者性（特許）**：DABUS事件で日米英独が「発明者は自然人」と判断。日本知財高裁**2025年1月30日判決（令和6年（行コ）10006号）はAIを発明者と認めず、内閣府「**知的財産推進計画2025**」が立法対応の検討を提起。ドイツ連邦通常裁判所2024年6月11日判決（X ZB 5/22）**も自然人要件を確認しつつ「人間の寄与があればAI関与発明も特許可能」と整理。米国はThaler対USPTOでヴァージニア東部地区裁が自然人要件を支持。南アフリカのみDABUSを発明者として登録（実体審査なし）。（[arxiv](#)）
- **研究資金・評価制度**：AI slop（低品質AI生成論文）の氾濫、偽造引用の増加、arXivが2025年11月にCS分野のレビュー論文・ポジションペーパーの受付を一時停止した事態。

6. 考察

6.1 記事の主張の妥当性

野口氏の中心命題――「**知識保有それ自体の価値低下**」「**仕事の重心が『答え』から『問い』へ移行**」――は、2026年時点の事実群（AIの仮説生成・数学推論の飛躍、共通テストでの高得点）と整合し、妥当性が高い。特に「AIが問い→答え→新たな問いの循環を回す」という指摘は、Co-Scientistの進化的アーキテクチャやマルチエージェント数学証明の実態と方向性が一致する。

一方で「**人間の関与がほとんどなくても科学研究が前進しうる**」という踏み込みは、現状のAI科学の実態を踏まえると**可能性の提示としては理解できるが、2026年9月時点の到達度として**

は過大評価の色がある。実験検証・再現性・独立検証は依然として人間が律速であり、ライデン宣言やDABUS判決群が示すように、責任・帰属・検証は人間に残るという制度的・認識論的境界は強固である。記事が朝日新聞の伝聞に依拠し固有名詞・一次ソースを欠く点は、論考の啓発性を損なわないものの、事実確認の観点では弱点である。総じて本記事は、**啓発的・警鐘的な評論**としては的確だが、**AIの自律性を現状よりやや前倒しで描いている**と評価できる。

6.2 研究開発部門・知財実務への示唆

- **発明発掘 / 研究テーマ設定**: AIが大量の仮説・設計候補を生成する時代には、「**良い問いの設定**」と「**候補の価値選別 (何を検証に進めるか)**」が競争力の核心になる。野口氏の言う「問題を探し出す能力」は、R&Dマネジメントの実務目標として具体化すべきである。
- **発明者認定**: 現行法上AIは発明者になれない(日米英独)。AI生成発明でも「**人間の実質的寄与**」を記録・立証する実務(実験ノート、プロンプト履歴、着想・選別・検証への関与記録)が重要になる。ドイツBGHの「人間の寄与があれば特許可能」という整理は実務上の指針となる。
- **先行技術調査 / 新規性判断**: AI仮説が「文献にない新規」を生む場合(CX-4945の抗原提示増強はその典型で、Googleも「文献に前例なし」と明言)、新規性・進歩性判断において**一次データや非文献情報まで探索範囲を広げる**必要がある。
- **進歩性判断**: AIが容易に多数の解を生む領域では、「当業者+AI」を前提とした進歩性ハードルの上昇が論点化しうる(法的には未確定、要注視)。
- **権利化戦略**: AI関与の**開示義務・トレーサビリティ**(EU AI Act第50条の表示義務、第14条の人間監督要件、2026年8月2日以降のEU AI Officeの執行など)が強まる方向。AI生成成果を営業秘密として秘匿するか特許出願するか**の戦略判断**、および開示・帰属の内部規程整備が急務である。

7. 参考文献

1. 野口悠紀雄「「仮説を作るAI」出現で科学者たちは不要に!?AIとの"知的分業"をどう進めるのか」ダイヤモンド・オンライン、2026年9月10日。
<https://diamond.jp/articles/-/398882>
2. 同(Yahoo!ニュース転載)、2026年9月12日。
<https://news.yahoo.co.jp/articles/6b7b48f6a8e6e050ed6212cd659fb9c2b08b2341>
3. 野口悠紀雄「新しい経済成長の経路を探る」連載トップ、ダイヤモンド・オンライン。
<https://diamond.jp/category/noguchi-neweconomy2>
4. 野口悠紀雄「経済最前線の先を見る」東洋経済オンライン(GPT-5.2共通テスト96.9%の回を含む連載)。
<https://toyokeizai.net/list/column/694384da6b208d3b9c0000cb>
5. ITmedia AI+「OpenAIの内部モデルが数学の未解決問題を証明——『重要な転換点』」2026年5月21日。
<https://www.itmedia.co.jp/aipius/article/2605/21/2000000013/>
6. ビジネス+IT「OpenAIのGPTが約80年未解決の数学的予想を解決」2026年5月。
<https://www.sbbbit.jp/article/cont1/185472>
7. ITmedia NEWS「OpenAI、ミレニアム懸賞問題『ナビエ・ストークス方程式』をAIが解決したと発表 数学者は経緯に反発」2026年9月9日。

<https://www.itmedia.co.jp/news/article/2609/09/2000001300/>

8. ビジネス+IT 「OpenAIが数学の『ミレニアム懸賞問題』の証明発表も、Anthropic数学者ら反発」 2026年9月。 <https://www.sbbbit.jp/article/cont1/186896>
9. Google DeepMind 「Co-Scientist: A multi-agent AI partner to accelerate research」 (ブログ) 。 <https://deepmind.google/blog/co-scientist-a-multi-agent-ai-partner-to-accelerate-research/>
10. 「Accelerating scientific discovery with Co-Scientist」 Nature (2026) 。 <https://www.nature.com/articles/s41586-026-10644-y>
11. Live Science 「Google's AI 'co-scientist' cracked 10-year superbug problem in just 2 days」 2025年。 <https://www.livescience.com/technology/artificial-intelligence/googles-ai-co-scientist-cracked-10-year-superbug-problem-in-just-2-days>
12. Google 「Google's Gemma AI model helps discover new potential cancer therapy pathway」 (C2S-Scale 27B、2025年10月15日) 。 <https://blog.google/innovation-and-ai/products/google-gemma-ai-cancer-therapy-discovery/>
13. Interesting Engineering 「'Milestone': Google AI reveals new method to make cancer treatable」 2025年。 <https://interestingengineering.com/health/google-deepmind-new-ai-cancer-treatment>
14. PR Newswire 「Google AI Breakthrough Highlights Silmitasertib (CX-4945)...」 2025年10月20日。 <https://www.prnewswire.com/news-releases/google-ai-breakthrough-highlights-silmitasertib-cx-4945-as-a-novel-pathway-in-cancer-immunotherapy-302589663.html>
15. Phys.org 「New 'AI scientists' are improving—but reveal their fundamental limits」 2026年5月。 <https://phys.org/news/2026-05-ai-scientists-reveal-fundamental-limits.html>
16. arXiv 「Are Researchers Being Replaced by Artificial Intelligence?」 2026年。 <https://arxiv.org/html/2605.16294v1>
17. Leiden Declaration on Artificial Intelligence and Mathematics (公式) 。 <https://leidendeclaration.ai/>
18. Leiden University 「Leiden Declaration: AI is challenging the core values of mathematics」 2026年6月2日。 <https://www.universiteitleiden.nl/en/news/2026/06/leiden-declaration-warns-ai-is-challenging-the-core-values-of-mathematics>
19. Communications of the ACM 「The Leiden Declaration: Mathematics, AI, and Making Our Values Explicit」 2026年6月25日。 <https://cacm.acm.org/blogcacm/the-leiden-declaration-mathematics-ai-and-making-our-values-explicit/>
20. Yahoo!ニュース エキスパート (佐藤仁) 「数学者らが過度なAI利用に警鐘『ライデン宣言』」 2026年6月。 <https://news.yahoo.co.jp/expert/articles/0d976ae760a1eea5b5b4a648a057a7602a4eabc6>

21. AIPPI 「AI as an Inventor of Patents? IP High Court Judgment and the 2025 IP Strategic Program」 (日本知財高裁2025年1月30日判決)。
<https://www.aippi.org/news/ai-as-an-inventor-of-patents-ip-high-court-judgment-and-the-2025-ip-strategic-program/>
 22. Norton Rose Fulbright 「Germany: AI cannot be named as inventor (BGH 2024年6月11日、X ZB 5/22)」。
<https://www.nortonrosefulbright.com/en/knowledge/publications/7de4a9ba/germany-ai-cannot-be-named-as-inventor-insights-from-the-bundesgerichtshofs-dabus-decision>
 23. Artificial Inventor Project 「Patent」 (DABUS各国動向)。
<https://artificialinventor.com/patent/>
 24. JST-CRDS報告書「AI for Scienceの動向2026」 CRDS-FY2025-RR-05、2026年2月。
<https://www.jst.go.jp/crds/report/CRDS-FY2025-RR-05.html>
 25. JST-CRDS/文部科学省「AI for Science 2026 公開シンポジウム」 (2026年9月17日)。
<https://www.jst.go.jp/crds/sympo/20260917/>
 26. McDermott 「When mathematicians push back: The Leiden Declaration...and why it matters」 (EU AI Act第50条・第14条との関係)。
<https://www.mcdermottlaw.com/insights/when-mathematicians-push-back-the-leiden-declaration-on-ai-and-mathematics-and-why-it-matters/>
-

付記: 確認状況と限界

- ダイヤモンド本体は前半 (無料) を逐語取得。後半 (会員限定) は検索スニペット経由で中見出しと本文相当を逐語回収したが、**末尾の結論文言および分業の具体的処方箋の逐語は未確認**。Yahoo!転載版は robots 制限で全文取得不可。
- 朝日新聞2026年8月22日一面記事そのものの本文・固有名詞 (研究機関・遺伝子名・数学問題名・AIモデル名) は直接取得できず、記事本文でも明示されていないため、2章の同定は状況証拠に基づく**高確度の推定**である。
- ナビエ-ストークス関連の細部数値 (約1万エージェント・約88時間等) は複数の日本語二次報道で一致するが、独立検証前かつ論争中である点に留意。
- 進歩性・「当業者 + AI」論、AI生成発明の権利化などの法的評価は各国で**未確定**であり、本報告の該当箇所はヘッジ付きの見通しである。